

機関番号：82619

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820080

研究課題名（和文） 狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究

研究課題名（英文） *Sketch of Horyuji Treasures produced by Kano Seisen' in Osanobu*

研究代表者

安藤 香織 (ANDO KAORI)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館

学芸研究部列品管理課登録室・アソシエイトフェロー

研究者番号：20555031

研究成果の概要（和文）：狩野晴川院養信は、模本制作に力を傾けた江戸時代後期の幕府御用絵師である。本研究では、養信の模写活動の全容を探るべく、まずは比較的規模が大きい作例として「法隆寺什物図」を取り上げ、その基礎的な調査研究を行った。調査は資料の撮影、計測、細部の観察などを主とし、これをもとに原本となった宝物や模写者の特定、模写方法の考察、資料内の全墨書の翻刻などを行った。さらに先行研究や、養信自筆の「公用日記」から模写者の情報をまとめ、制作の背景を考察した。

研究成果の概要（英文）：Kano Seisen' in Osanobu, an appointed painter of the Edo shogunate in the late Edo period, actively produced reproductions and sketches of classic works. In this research project, a fundamental survey of one of his major projects, Sketches of Horyuji Treasures, was conducted with an aim to overview Osanobu' s reproduction activities. Through photography, measurement and detailed observations of the materials, the original works of the sketches were identified, as was the person who produced the sketches and the methods they used. All inscriptions in the sketches were also transcribed. Furthermore, this research looked into the background of Osanobu' s project by reviewing information of the involved painters through previous studies and Osanobu' s journal, Koyo Nikki.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	570,000	171,000	741,000
2010年度	250,000	75,000	325,000
年度			
年度			
年度			
総計	820,000	226,000	1,066,000

研究分野：日本絵画史

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：美術史、狩野派、木挽町、晴川院養信、模本、模写、法隆寺、東京国立博物館

1. 研究開始当初の背景

(1) 狩野晴川院養信

江戸時代後期の幕府御用絵師・狩野晴川院養信（かのうせいせんいんおさのぶ、1796～1846）は、木挽町（こびきちょう）狩野家第

9代当主であり、当時の幕府御用絵師の中でも奥絵師、頭取を務めた人物である。近年の狩野派研究の進展のなかで、養信は特に評価が見直された絵師の一人である。

養信研究は昭和25年、木内武男氏により、

奥絵師の公務の内容を綿密に綴った養信自筆「公用日記」（東京国立博物館所蔵）が新資料として紹介されたのに始まり、昭和31年には大西芳男氏により「公用日記」が再度取り上げられ、養信の画業が日記を通して紹介された（『MUSEUM』61号）。

昭和54年には松原茂氏が「狩野晴川院と絵巻」（『MUSEUM』344号）と題し、東京国立博物館所蔵の木挽町伝来狩野派模本類のうち、養信が制作した古絵巻の模本76件、延べ130数巻の網羅的な調査報告がなされ、養信の模写に対する情熱とその徹底ぶりが指摘された。本格的な養信研究の嚆矢であり、養信の「好古」「記録好き」「几帳面」などのイメージを決定づけた意味でも、重要な論文と言える。その後も、小林忠氏や片桐弥生氏らにより絵画史における養信の位置づけや作品研究が発表された。

昭和63年には、東京国立博物館における館所蔵の模本類の調査研究として、養信が御用絵師として頭取を務めた天保・弘化年間における江戸城再建のための障壁画下絵類が取り上げられ、その報告書が刊行された（『調査研究報告書 江戸城本丸等障壁画絵様図版篇・本文篇』、昭和63年）。次いで平成4年には養信と弟子らの制作した高野山学侶宝蔵古器及楽装束図が調査された（『調査研究報告書 高野山学侶宝蔵古器及楽装束図』、平成4年）。

この間、松原氏や池田宏氏により「公用日記」の研究もさらに進み、一方、安村敏信氏らにより狩野派の粉本主義を再評価する論考も発表された。以上の研究成果として、平成7年には板橋区立美術館において「狩野晴川院養信の全貌」展が開催されるに至った。

このように、養信研究は屏風や掛幅などの作品、模本類、「公用日記」など、各側面から複合的に進められてきた。近世から近代への移行期にあって、多数の残された関係資料を有する養信は、今後さらに重要な位置を占めていくと考えて間違いないだろう。

（2）法隆寺什物図

法隆寺什物図は、養信とその弟子たちが法隆寺の所蔵する宝物を模写した11巻の模本である。これまで本資料については、池田宏氏「『高野山学侶宝蔵古器及楽装束図』と狩野晴川院」（『調査研究報告書 高野山学侶宝蔵古器及楽装束図』）、古田亮「法隆寺什物図」（『特別展 法隆寺献納宝物』作品解説、平成8年）に概略が記されている。

2. 研究の目的

本研究は、未だ全容が明らかでない養信による宝物模本制作の全体像に迫り、養信の絵師としての活動全般の解明へとつなげるための一歩という位置付けで開始した。

そもそも、東京国立博物館には木挽町狩野

家伝来の模本類が数千点所蔵されている。これらは養信の息子、勝川院雅信（しょうせんいんただのぶ、1823～80）から一括して博物館が購入したものである。内容としては、教育に関連する粉本とその成果物である稽古画が大部分を占めるが、その他、古画、古絵巻、古器物などの模本（以下、宝物模本）と、御用のための下絵の計3つに大別できる。

宝物模本の研究は、古絵巻を原本とするものに関しては、松原茂氏によって網羅的に紹介されたが、絵画以外の、古器物などを原本とするものに関しては、天保7年（1836）に高野山天野社伝来の諸宝物を写した高野山学侶宝蔵古器及楽装束図が唯一、画像と基礎情報を掲載する報告書の刊行された例である。養信の模本制作については、その力の入れようを考えれば全容が解明されるのが望ましい。そのため、まずは高野山古器図と同様に古器物を写し、かつ比較的規模の大きい作例として法隆寺什物図を取り上げ、基礎的な調査とその詳細な報告をし、これまでの研究を補完しようと考えた。

3. 研究の方法

（1）平成21年度

①調査ならびに写真撮影

法隆寺宝物図について、何が模写されているか、各宝物が何図から構成されているのか、それぞれの図の種類（拓本・白描・著色・淡彩など）など、基本事項を調査すると同時に、法量計測や紙数の確認をした。さらに、調査を効率的に行えるよう、今後の利便性と普及性も考えて、デジタル写真撮影を行った。

②資料中の墨書翻刻

①の調査結果と撮影画像をもとに、本資料にみられる墨書、すなわち宝物の名称や模写者名、模写年月日、その他の注記を翻刻した。

③宝物、模写者の整理と一覧表作成

膨大なデータを整理する上で、表作成は効果的である。①と②をもとに情報を整理し、模写された宝物の名称、各宝物の図数と図の種類、模写者名、現存する法隆寺宝物の有無、同時代資料『御宝物図絵』、『御宝物図絵追編』、『御伽藍御宝物略御縁由』との関係を示す一覧表を作成した。

（2）平成22年度

①調査ならびに写真撮影

前年度の調査を終えて、新たに必要性を感じたのが、周辺作品の調査であった。そのため、22年度には法隆寺什物図以外の寺社宝物模本について、特に関係が深いと思われるものについて調査、撮影に取り組んだ。

②資料中の墨書翻刻

③宝物、模写者の整理と一覧表作成

精度を上げつつ、引き続き取り組んだ。

④「公用日記」の記述確認、翻刻

法隆寺什物図に関わる記述がないか、本資

料が描かれた天保 11 年、13 年分を中心として「公用日記」の記事を確認し、該当する記事を翻刻した。

⑤模写の手順、技法の考察

①の調査成果と撮影画像を利用しつつ、模写の際、どのような手順で、またどのような技法で、特に何に気を付けて描写しようとしていたのか考察した。

⑥模写者に関する備考

模本を制作した養信とその弟子たちについて、それぞれの模写の割合や、各人の担当モチーフについて、規則性があるかを調査する。そして、養信ら木挽町狩野家の活動を詳細に調査した池田宏氏「狩野晴川院『公用日記』にみる諸相」(『東京国立博物館紀要』28号、平成⑤年)を参照しながら、弟子たちそれぞれの活動と本研究の調査結果とをつきあわせ、木挽町狩野家全体の分業体制や、寺社宝物模写の意義を考察した。

4. 研究成果

研究成果は「《調査報告》木挽町狩野家伝来「法隆寺什物図」として『MUSEUM』631号(2011年4月)に発表した。ここには論文中から要点を抜粋して記述する。

(1) 概要

法隆寺什物図は全 11 巻、紙本着色、卷子装。本紙は主に楮(こうぞ)系の紙であるが、一部、雁皮紙(がんびし)や画仙紙(がせんし)系の紙を使用している。制作者は、養信、雅信を含む狩野派絵師 18 名で、当時は法隆寺の所蔵していた宝物 99 件 145 点を模写したものである。

論文中では、研究成果として①法隆寺什物図宝物一覧表、②模写者一覧表、③墨書釈文を作成した。①は法隆寺什物図中に模写された宝物を一覧にし、後に述べる天保 13 年の出開帳の際、法隆寺が出版した『御宝物図絵』、『御宝物図絵追編』、および『御伽藍御宝物略御縁由』(以上、東京国立博物館所蔵)の該当宝物と、現存する宝物の所在を併記したものである。②は、法隆寺什物図中にみられる模写者を、狩野家における高位の順に表記したもの、③は、本資料中の全ての墨書を翻刻し掲載したものである。

(2) 制作時期

制作は二次にわたる。第一次、天保 11 年は、養信が三村晴山、狩野藤太(養長)ほか弟子数名を西国に派遣した際のもので、「公用日記」同年 2 月 10 日条にその旨の記述がある。一方、法隆寺什物図第七巻・古鏡(養長模)にも天保 11 年 6 月の年記があり、模写者も一致する。

第二次は、天保 13 年の 6 月 11 日より、江戸・両国の回向院で開催された法隆寺の出開

帳を契機とするものである。「公用日記」天保 13 年 3 月 28 日条によると、養信は「法隆寺の宝物は格別古いもので、御用の絵画等制作に参照できるものも多いため、当年の出開帳の際に一覧し、物によっては模写しておきたい」と寺社奉行に願い出で、その後、奉行より許可がおりている。養信と弟子らによる模写活動は、出開帳の前後を含めおよそ 5 ヶ月間に渡ったようであり、この間の年記が法隆寺什物図にも確認できた。また、この出開帳時に法隆寺側が作成した『御宝物図絵』、『御宝物図絵追編』、『御伽藍御宝物略御縁由』と法隆寺什物図とを突き合わせると、ほとんどの宝物が一致するため、大部分が第二次に制作されたと考えられる。

(3) 基本の模写方法

法隆寺什物図の模写方法は非常に丁寧なもので、特に宝物が立体物である場合にその真価を発揮している。いくつかの例をもとに、本資料における立体物を原本とする場合の基本の模写方法をまとめると、まず第 1 図目は宝物の全体を把握できるよう彩色を施した全図を描き、以降は幾つかの異なる角度から宝物を写す。その間、必要に応じて図解を添え、拓本を駆使して情報を補う。さらに墨書にて模写者名や法量などを書き入れた上で、模写者自身の考証を加える、という構成が見てとれた。また写し方は、絵具の剥落や虫損などをそのまま写し取る現状模写の方法を採っていた。これらのうち、墨書による注記、考証と現状模写方法は、宝物の形態に関わらない共通項であり、本資料以外にも、養信が制作した多くの模本に共有される特徴である。

(4) 立体物模写の工夫

宝物が立体物である場合と、平面物である場合との端的な違いは、図数に表れる。宝物を平面物、立体物で分けると、第 1 巻の竹帙 2 点、第 4 巻の染織品各種、第 10 巻の十六羅漢図、第 11 巻の舍利殿障壁画などが平面物にあたり、そのほとんどは、1 点につき 1 図の彩色模本で完結している。これに対し、立体物は宝物により増減があるものの、平均は 4 図程度で、平面物とは明らかな差がある。なかでも例えば、第 9 巻の竹箆筒(雅信模)は図数の多い部類であり、様々な角度からの彩色画に加え、ほぼ等しい構成で拓本も採取するほど念を入れており、一宝物に合計 18 図、1 巻を費やしている。

こうして両者に図数の差ができる要因は、平面物と立体物との根本的な性質の違いにある。すなわち、平面物は 1 図ではほぼ全ての必要情報を盛り込めるのに対し、立体物を見る角度により異なる情報を提示するため、より詳しく正確に写そうとすれば、自然、図数

が多くなるのである。この点からしても、立体物模本には養信らの目指すところがより良く現れていると思われるが、本資料には図数を増やす他にも、次のような模写の工夫が見られる。

①図解

立体物模本では、細かな構造や意匠、文様などをより精密に記録する目的で、図解という要素が加えられている。いくつか例を挙げると、第5巻の片輪車御手箱（模写者不詳）では、箱内の蒔絵の意匠を彩色画の展開図にして写している。また第7巻の水瓶（雅信模）では、龍頭形の蓋を閉じた状態の彩色画に加え、開いた状態を白描にて写すことで、宝物を使用した際の可動部分が示されている。第3巻の高燈臺（養信模）では、宝物を部品ごとに分解した状態で描いている。まるで設計図のようであるが、この様子からして、嵌め込み式の部分を実際に外して計測し、模写したのだろうと思われる。

奥絵師の業務には、様々な調度品や工芸品の下絵を作図することも含まれていた。それを考慮すれば、片輪車御手箱の展開図は、そのまま工芸品の下絵になりそうな図であり、水瓶や高燈臺も、やはり実際の制作に役立つよう、構造や意匠の隅々に気を配って記録したのではないかと思われる。古器物模写に際し、これを余すことなく観察し、墨書による考証だけでなく、図解を添えて情報の密度を高め、実用に備えようとしたのだろう。

②拓本

拓本とは、対象物の凹凸を墨によって紙に写し取る技法で、対象物に紙をあてて固形の墨で擦る乾拓と、対象物の凹凸に湿らせた紙を沿わせ、墨を含ませたタンポでたく湿拓の二種に大別される。本資料で使用されているのは全て乾拓で、第9巻末の墨書に「勝川雅信以石花墨摺之」とあることから、油煙を蠟で練り固めた石花墨を使用したとわかる。使用した画材名が明記される珍しい例である。また、第9巻の拓本部分には、現在も拓本に適するとされる画仙紙系の紙を使用している。

物そのものから直接形を写しとる拓本は、最も正確な模本と言うことができ、大きさを計測する必要もないため、ある程度の摩擦に耐えられる木工品や金工品では積極的に用いられている。

③合印

法隆寺什物図では二か所で使用されており、第7巻・風炉では、拓本を取る際に左右の紙の合わせ目に記し、裏打ちする時にはこれを目安に張り合わせたようである。注目したいのは第5巻・御唐櫃（模写者不詳）である。第1図目は彩色・半横の全図、第2、3図目はそれぞれ白描で全図と蓋裏を描いた後、第4図目以降に合印を利用して、唐櫃表

面に螺鈿で施された鳳凰円文の詳細を説明している。

第4図には「△ □ ○ ○○ △△ + # ● /此八ツ之合印ニ合セテ紋之写ヲ見ルベシ」という注記と共に、「表」と題した白描の全図と、同様の「後」図がある。両図には円文の位置が示され、その一つ一つに、朱で八つの合印が付されている。次の第五図には「朱ノ合印ヲ／ヒナカタニ合セテ／紋ノアリ所ヲ見ルベシ」と注記があり、貝の割れ目まで正確に描いた実物大の各円文の図が、箱の四側面分描かれている。つまり、初めの全図を雛形とし、これに付された合印を手掛かりに、後半の詳細な部分図と照らし合わせて見よというのである。合印は、養信の実質的で、合理的な模写の考え方を良く反映していると言えよう。

(5)模写者備考

法隆寺什物図の模写者は、資料中の模写者自身の記名により、養信を筆頭とする総勢18名によるものとわかった。このうち最も多いのは養信の息子、雅信で、1人で31件を模写しており圧倒的に多い。先の、1巻分を費やした竹箆筥（雅信模）や、水瓶（雅信模）の洗練された描線を考え合わせても、雅信がこの模本制作に意気込みを持って取り組んだ感じが感じられる。「公用日記」中で絵師名が併記される場合をみると、雅信はベテランの董川中信の下に付くことも多く、まだ経験を積んでいる段階であるとわかる。雅信は「努力によって、持ち前の弱点を矯正しつつ次第に鍛え上げてゆく型の絵師」と評される通り、努力の人であったようだ。この年21歳であり、病気がちな父に代わり次期木挽町狩野家当主となる行く末を見据えて、こうした体制が採られたのかと推測された。

また、既知の通り、狩野家では習練を修めた証に師の別号の一字（その後、名の一字）を拝領するが、福田柳濤以下、本資料中における下位の弟子7名は、みな一字拝領前の絵師である。彼らに、狩野家の者だが御用手伝の経験が浅い狩野次郎三郎信之と修行中の雅信を加えた計9名が、第10巻の十六羅漢図の模写者である。これまで述べてきた立体物模本に比べ、平面物模本は平常の習練と同様であり、比較的容易だったのであろう。宝物を模写できるまたとない機会が、修業途中の絵師たちの糧となるよう配慮されたのだと察せられる。同種の配慮は第5巻の文臺（養信、信之模）にも見られ、全図を養信が描き、平面的に描けば良い天板上面の図様は、三浦弘道に写させている。画塾における絵師の教育・養成において、木挽町狩野家の有する優れた一面が表れていると言えよう。

(6)まとめ

従来、特に養信の制作した古絵巻の模写について、正確さを追求する姿勢や、その徹底ぶりが指摘されてきたが、本研究の結果、そうした姿勢は立体物を描いた古器物模本に、より明快に表れているとわかった。その具体例としては、平均4つの角度を変えた図を組み合わせることに加え、様々な図解法、拓本の使用、合印の使用を挙げた。これらは、見る角度によって異なる情報を提示するという立体物の根本的な性質を考慮したもので、高い密度で、正確に、合理的に写そうとする養信の強い意志が汲み取れた。

これら一々を見ても明らかな通り、本資料は説明的要素が非常に多く、時に執拗と感じられるほどの丁寧さを持っている。それは、一つには「公用日記」に見た通り、御用の絵画制作の際に手控えとして参照する、という養信自身に関わる現実的な目的があったことに由来すると考えられる。一方、宝物模本の制作には、子孫のため狩野家に代々保管しようという目的もあった。この模本を受け継いでゆく木挽町狩野家の子弟らを思い遣り、狩野派の一層の繁栄を願えばこそその描写であったと推察されるのである。先に述べた弟子たちへの配慮も考えれば、より良く理解できよう。

周知の通り、模本は、原本を復元的に考察する際の手掛かりとして有効であり、また制作した画家や流派の画業や教育法を知るにも肝要である。冒頭で述べた通り、東博所蔵の狩野派模本類は、江戸時代後期に狩野派筆頭であった木挽町狩野家に伝来したものであり、日本絵画史における重要性は高い。早々に宝物模本の全体像を把握できるよう、順次調査を進め報告するつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①安藤香織 「『調査報告』木挽町狩野家伝来「法隆寺什物図」」、『MUSEUM』、査読あり、631号、2011年、P63～103

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 香織 (ANDO KAORI)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部列品管理課登録室・アソシエイトフェロー

研究者番号：20555031